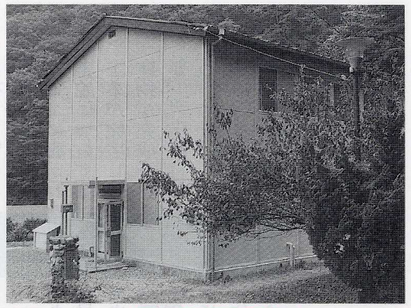
帝釈峡遺跡群発掘調査室は今

文学部考古学講座
中越利夫

帝釈峡遺跡群発掘調査室は、広島県東北部の比婆郡東城町帝釈未渡にある。東城町と神石郡神石町一帯は、帝釈川がきざんだ石灰岩のみごとな景観がみられ、国の名勝「帝釈川の谷」として指定され、一般には帝釈峡として親しまれている。帝釈峡は神竜湖より上流域が上帝釈、下流域が下帝釈と呼ばれ、調査室は帝釈峡の入り口（上帝釈）にある。


▲帝釈峡遺跡群発掘調査室

帝釈峡遺跡群の発掘調査と調査室の開設

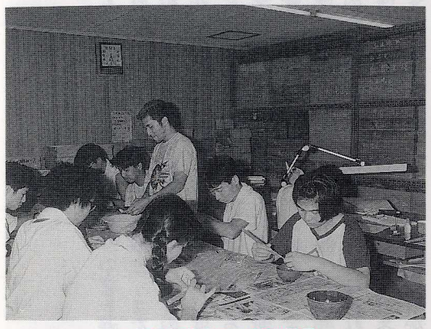
帝釈峡の地域に石器時代の遺跡が発見されたのは一九六一年である。東城町の馬渡林道の拡復工事で、切り取られた崖面から風化したカワシンジュガイが採集され、その後今から七～八千年前の縄文時代早期の押型文土器などが出土することが確認された。そして翌年のこの帝釈馬渡岩陰遺跡の第一次調査では、旧石器時代から縄文時代前期におよぶ遺物包含層が明らかになった。しかも第四層からは旧石器時代末の有茎尖頭器（槍先）と縄文時代の指標である土器・石鏃（矢じり）とがともに出土した。人工遺物のほか更新世の絶滅動物であるオオツノジカや、新たな食料としての貝類（カワシンジュガイ）が出土するなど、旧石器時代から縄文時代への移り変わりの様相が明らかになった。この時期の遺跡は、当時全国的にも数少ないものであった。

馬渡遺跡の調査の成果から、この帝釈峡一帯に他にも石器時代遺跡が存在することが予想され、さらに石灰岩地帯の洞窟・岩陰は、その特性から古い人骨の出土や、安定した堆積層から文化の変遷を連続して明らかにできることが期待された。そこで一九六三年からは全国の二十大学におよぶ研究者が参加して、考古学、人類学、古生物学、地質学などの各分野を総合した帝釈峡遺跡群発掘調査団（団長、広島大学・松崎寿和）を組織し、発掘調査と分布調査を実施してきた。

調査室の近くにある帝釈寄倉岩陰遺跡（国指定史跡）に代表されるように、縄文時代全般の遺物包含層が順をおって堆積しており、縄文文化の変遷を明らかにしてきた。そして神石町の帝釈観音堂洞窟遺跡の第二十五層（旧石器時代）から人骨（その後の顛末については『帝釈峡遺跡群発掘調査室年報』Ⅳを参照されたい）が出土したことを契機として、一九七七年に現地に帝釈峡遺跡群発掘調査室が開設され、以後調査室を拠点に調査を推進している。調査室開設以後も、調査団以来の調査研究組織をひきつづき、また学生も広島大学生のみならず、他大学からの調査参加がある。

施設の概要と調査室の一日

調査室は、土地面積五五二・四六㎡で、建物一棟（プレハブ造り二階建、建面積九七・二〇㎡）と倉庫四棟からなる。建物一階は研究室、保管室、宿泊室、厨房、食堂兼講義室、洗面所、シャワー室などからなり、二階は遺物整理収蔵展示室・暗室・宿泊室からなる。宿泊室は、一階四名と二階十二名のあわせて十六名収容できるが、学生が多い場合は隣にある東城町立帝釈郷土館の部屋を借りたりしている。遺物整理収蔵展示室は、学生の自習の場でもある。二階部分の遺物収蔵スペースも、毎年増える遺物のため収納しきれなくなり、遺物用の倉庫を増築した。しかし、あと数年分しか余裕がない状況である。


▲整理収蔵室での整理風景

調査室は、夏、秋などの休業中に実施している発掘調査時に主に使用している。その時々により利用人数は異なるが、夏季調査の場合、教官、学生をあわせて二十名前後で、三十日間の自炊による合宿生活をおくる。学生が交代で食事の当番にあたり、四、五日に一回のペースで当番は回ってくる。食事当番は、朝食、弁当、夕食を作るだけでなく、掃除、洗濯そして前日の出土遺物の整理を行う。洗い物専門であった男子一年生も二年、三年生になると、包丁さばきも上手になり、料理の本をみながらけっこう料理ができるようになる。いっぽう調査に出る者は、朝八時過ぎに調査室を出発し、夕方六時過ぎに帰ってくる。夕食の前後にシャワーをあびたり、整理室で出土遺物の洗浄や集計などを行う。遺物量が多いと十一、十二時になったりする。調査日誌を書き、翌日の調査の打ち合わせを行って一日が終わるのである。

▲帝釈弘法滝洞窟遺跡前の帝釈川河原にて

▲帝釈峡　雄橋（おんばし）

調査室は刺激の少ないところにあり、発掘調査づけの毎日である。二十四時間顔を合わせ、それでも笑い声がたえず、和気あいあいとやっているのも、クラブの合宿とは違ったところがあるのであろう。

調査団の頃は、地元の学校の寄宿舎や講堂などで寝泊まりしていた。調査室ができてからは、宿泊・遺物整理室が完備しているため、発掘調査のみならず、遺物整理の方法を実地で習得する実習の場としても活用している。

帝釈峡遺跡群の発掘調査研究

一九六二年の馬渡遺跡の第一次調査から、帝釈峡遺跡群の調査研究も三十三年目になり、調査室が開設されて十七年になる。

日本国内では、石器時代の遺跡群を三十年以上も継続して調査している例は他になく、世界的にも数少ない例のひとつである。遺跡群は、東城町、神石町、豊松村、油木町、総領町、上下町にまたがり、現在のところ五十一か所の洞窟・岩陰遺跡を確認している。そのうち調査終了遺跡が八か所、継続中の遺跡が三か所である。発掘調査のみでなく整理をあわせると、まだ先は長い。

考古学は、土に埋もれた人間の歴史・生活を明らかにする学問であり、石器時代は社会発展の歴史からすると、長くゆっくりとしている。遺跡群の調査研究も、その厚い堆積層を一枚一枚はがしながら、そして時に歴史的発見に遭遇することを期待しながら、調査・研究を進めていきたい。

（なかごし・としお）

サークル紹介

来たれ！　ハンドボール部へ

工学部第二類（電気系）一年　片山武士

皆さん、ハンドボールというスポーツを御存じですか。

日本ではマイナーですが、日本の外では、特にヨーロッパではかなりメジャーなスポーツです。

我々ハンドボール部は、現在男子十九人、女子十一人、マネージャー二人で活動しています。練習は週5日、西条キャンパスの西体育館で行っています。

男女とも、中四国ではトップレベルの実力を有し、五月に行われた春季中四国学生リーグでは、男女とも優勝しました。

▲'94春季中四国学生リーグで

四年生が抜けて新チームとなった今、次の秋季中四国学生リーグで優勝し、インカレに出場できるように練習しています。部内では、みんな、明るく楽しくやっていて、先輩後輩の間でも冗談を言い合ったりしています。

しかし、一度練習が始まれば真剣そのもので、プレーについて先輩後輩など関係なく議論することもしばしばあります。実力があれば一年でも試合に出られるので、大会の前ともなれば、部員みんなが、日頃にも増して一生懸命に練習しています。大学から始めた初心者でも、経験者より上手になった人もいます。興味のある人は一度練習を見に来てください。

（かたやま・たけし）